

図 1

A. 遺伝子解析装置

(RD - 100i システムクス社製)

B. 陽性症例

C. 陰性症例

図 2 . 5 年累積生存率

SLN 生検生検施行群では 94.4% , SLN 生検未施行群では 86.7%であった . 有意差は認めないものの , SLN 生検施行群において生存率が高い傾向を示した .

表 1 患者背景

表 2. 病理組織学的診断結果ならびに OSNA 法
による結果の比較

病理組織学的診断と OSNA 法の結果は 28 例
中 27 例で一致した。一方，結果が不一致で
あった症例が 1 例みられた。本症例は病理組
織学的診断では転移陰性であったが，OSNA
法による遺伝子解析の結果が転移陽性であっ
た症例であった。

表 3. 病理組織学的診断，遺伝子解析ならび
に免疫組織学化学染色の結果

結果がすべて一致したのは 26 例であった。
結果が不一致であった 2 例は，病理組織学的
診断と遺伝子解析は転移陽性で，免疫染色が
転移陰性であった 1 例と，免疫染色と病理組
織学診断が転移陰性，遺伝子解析が転移陽性
の 1 例であった。

表 4 . SLN 生検施行群と SLN 生検未施行群
における後発転移の比較

SLN 生検施行群では後発転移がみられなかつ
たが，SLN 未施行群では 3 例にみられ，SLN
施行群と比較し有意に多かった。